

# 「わがやの宝本」エピソード

「おやこ一冊読書展」に応募いただいた509点の宝本エピソードの中から、数点をご紹介します。

鹿児島県立図書館 企画展示「おやこ一冊読書」展より  
(平成25年10月23日(水)～11月24日(日))



(一般応募の部より)

母		子	<p>【エピソード】</p> <p>わがやの宝本は、「てんてんてん」という絵本です。長女の3か月検診の時、保健所で市からいただいた絵本。読み聞かせ初心者之母と、絵本に初めてふれる娘。「わかっているのかなあ。」と思いながら、何回も繰り返し読んでいくと、娘が「じーっと絵本を見ている!」「ページを自分でめくった!」「『てんてんてん』と片言でおしゃべりした!」「『グルグルグ』と指で絵をなぞった!」と、成長を一緒に喜んだ本です。</p> <p>その後、次女、長男と受け継がれ、たくさん増えた絵本の中でも、最初にお気に入りになって、くり返し読むのは、やっぱりこの絵本です。現在は、小学2年生の長女が、10か月の長男に読み聞かせています。これからもこの絵本に子どもたちの成長を見守ってほしいです。</p>
母		子	<p>【エピソード】</p> <p>息子を出産する前にいただいた本です。出てくる言葉は、「もこ」「によき」といった擬音しか出てこず、初めは頭の中で「?」がいっぱい不思議な本だなと感じました。お腹にいる息子は、反応して動くことができました。</p> <p>誕生してからは、息子への読み聞かせが始まり、デビュー作です。強弱をつけて読んであげたり、「ばく」の所は、お腹を食べようと動作を加えてみたり、ページをめくる楽しさがいっぱい、息子も大喜びでした。何度も何度も手にして、今ではボロボロになってしまいましたが、私と息子の思い出がたくさんつまっている「宝本」です。</p>
父		子	<p>【エピソード】</p> <p>息子が幼稚園の頃に手にした本です。おべんとうを作っていく短い絵本なのですが、おもしろそうな挿絵と、上手なくすぐり言葉で、私も息子も何度も何度も読みました。</p> <p>遠足のお弁当に同じものをリクエストした時は、妻も苦笑しながら、作っていたのもいい思い出です。</p> <p>絵本が人を育てる力を持っているということを教えられた1冊です。</p>

母



子

書名 まねっこどうぶつえん

著者名 田中ひろし/文  
せべまさゆき/絵

出版社名 ほるぷ出版

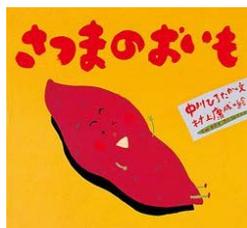
【エピソード】



耳の聞こえないお姉ちゃんと、耳の聞こえる妹と2人一緒に初めて読んであげた本です。

まだお互いが幼く、コミュニケーションをなかなかとることができませんでしたが、この本を2人に見せると、絵本のパンダや犬の手話の絵を見て、2人で楽しそうに絵の真似をして手を動かしていました。子どもたちがお互いの表現で会話ができるようになった大切な絵本の1冊です。

母



子

書名 さつまのおいも

著者名 中川ひろたか/文  
村上康成/絵

出版社名 童心社

【エピソード】



この絵本と出会ったのは、上の子どもが幼稚園の頃です。鹿児島に住んでいるということもあって、「さつま」という題名も気に入り、見てみると、おいもが人間と同じように歯磨きをしたり、運動をしたりと、子どもにとってわかりやすく引きつける内容になっていました。

そして最後には、子どもなら誰もが大好きであろう「おなら」についても書かれていて、読むたび笑いが生まれます。そして、時は流れて今は、妹たちに上手に読み聞かせをしてきています。本を読む、読んでもらうという素敵な時間が流れています。

母



子

書名 わたしがあなたを選びました

著者名 鮫島浩二/作  
植野ゆかり/絵

出版社名 主婦の友社

【エピソード】



この本は、私がお母さんになるずっと前に出会った本です。その時に、すごく素敵な本だと思い、いつか自分が子どもを授かったら買おうと思いました。

長男を妊娠したときに購入し、それから7年間大切にしています。子育てに悩んだり、反省したりする度に、読みたくなる1冊です。子どもたちが自分を選んで生まれてきてくれたことを改めて実感し、よりいっそう子どもたちを愛しく感じさせてくれます。子どもたちが大きくなって、お父さん、お母さんになった時に、もう1度読んでもらいたいです。受け継いでもらいたい私の大好きな1冊です。

母



子

書名 どこどこどこ いってきまーす

著者名 長谷川義史/作・絵

出版社名 ひかりのくに

【エピソード】



わがやの宝本は、「どこどこどこ いってきまーす」です。小さかった娘にとって、絵本とは親が読み聞かせてやるというものでした。この本は、ただ聞かせるだけでなく、親が読み、たくさん絵の中から探しているものを見つけるといった新しい形の子どものためにはワクワクするような本でした。少し大きくなった娘と一緒に本をじっくり見て「どこどこどこ」と、思わず口にしてしまいがちながら、楽しく探しました。だんだん私より早く絵を見つけることができるようになり、成長も感じる事ができる我が家にとって本当に「宝本」の1冊です。

母



子

書名 メガネをかけたら  
 著者名 くすのきしげのり/作  
 たるいしまこ/絵  
 出版社名 小学館

## 【エピソード】

夏休みの“課題図書”でたまたま目にした絵本です。ちょうど絵本に出会う1か月前に3歳の娘（次女）が、眼鏡をかけることになり、娘はこの絵本の主人公のように眼鏡をかけることをはずかしがっていました。

2回目（眼鏡をかけはじめてから初めて）の定期検査と同じタイミングでこの絵本の読み聞かせをしました。すると、眼科の先生の声かけはもちろんですが、この絵本にも影響を受けたようで、以前よりも眼鏡をかけてくれるようになりました。「メガネの本読んで！」とよくせがんできます。長男も「おにいちゃんといっしょだよ。」、長女も「かけた方がよく見えるんだよ。」と家族みんなで励ます姿が見られます。

母



子

書名 きみの友だち  
 著者名 重松 清/著  
 出版社名 新潮社

## 【エピソード】

決して本を読むことが好きとはいえない親子ですが、ドラマ「とんび」を見てから、重松清さんの本を何冊か読み出した娘。机の上に置きっぱなしの本をたまたまめくったら、すっかり虜になってしまった私。娘より先に読み終えてしまいました。

小さい頃は、同じ本を読んで同じ場面で同じような気持ちになることで、ほのぼのとした気分になったものですが、この本では、現役真っ最中の娘と、数十年前のほろ苦い思い出と共に読む私とでは、同じ場面でも、違う感じ方をするのだろう、そう思った時、大きくなった娘の成長を嬉しく、また同じく寂しく感じた、大切な1冊になりました。

母



子

書名 うずらちゃんのかくれんぼ  
 著者名 きもとももこ/文・絵  
 出版社名 福音館書店

## 【エピソード】

この本と出会ったのは、娘（長女）が3歳の時でした。最初、読み聞かせしたところ、目をくぎ付けにして、嬉しそうに見ていたのが今でも印象に残っています。それから、何十回も読み聞かせし、そのうち、自分でページをめくれるように、そして自分で読めるようになりました。

次に長男、次女と家族みんな、本がボロボロになるまで読みつくしました。子どもたちみんな、絵本の文章を覚える程でした。

色のタッチも鮮やかで、かわいいうずらちゃんたちが今でも大のお気に入りです。

母



子

書名 くろくとふしぎなともだち  
 著者名 なかやみわ/さく・え  
 出版社名 童心社

## 【エピソード】

我が家の宝本は「くろくとふしぎなともだち」です。子どもがまだ小さかった頃、クレヨンでお絵かきするのが大好きで、よく読み聞かせしていた1冊です。色々なクレヨンたちが絵をかいているページはとてもきれいで、読み終わった後は、必ずお絵かきタイムになっていました。今でも絵を描くことが大好きなのは、この本のおかげだと思っています。

今では、1歳になる3番目の娘にも読み聞かせをしており、これからどんな絵を描いてくれるのか楽しみです。



【エピソード】

長男と二男が保育園に通う頃、「ぐりとぐら」のシリーズをよく読み聞かせていました。その中で、二人が特に気に入っていたのがこの本です。海坊主が出てきて、ぐりとぐらに色々な泳ぎを教えてくれるところは、「自分たちもやってみたい!」と、畳の上で真似をしたり、お風呂でやってみたり、当時通っていたスイミングスクールでも練習が終わってから遊んでいたように記憶しています。

母 子

書名 ぐりとぐらのかいすいばく  
 著者名 なかがわりえこ/文  
 やまわきゆりこ/絵  
 出版社名 福音館書店

今年大学生になった長男が、「絵本のレポートを書かないといけない。僕が昔好きだった本、何だっけ。」と、我が家の本棚から引っ張り出してきたので、私も思い出し、二人で「だったねえ。」と話をしたのでした。



【エピソード】

今年、社会人になった娘が小さいときに大好きだった絵本です。ホットケーキの焼ける音のくり返しと、「まあだ まあだ」「はい、できあがり」が、今懐かしく思い出されます。

母 子

書名 しろくまちゃんのほっとけーき  
 著者名 わかやまけん  
 出版社名 こぐま社

子育てと仕事で忙しかった頃、朝、ぐずる娘に「しろくまちゃんのほっとけーき焼こうか?」と言うと、ご機嫌が直ったものです。そういえば、夫も私が出張で不在の時に、しろくまちゃんのほっとけーきに挑戦して、失敗したというエピソードを、娘が日記に書いたのも、我が家の宝本の思い出です。



【エピソード】

この本は、子どもたちが2、3歳の頃に毎日のように読んでいた本です。夜、寝る前に「何を読む?」と聞くと、かならず「ピヨピヨスーパーマーケット」と答えていました。スーパーに沢山の商品の絵が描かれていて、ちょうど言葉を覚える頃でもあり、絵を指さしながら「りんご、バナナ、トマト・・・」など、答えるのがとても楽しかったようです。

母 子

書名 ピヨピヨスーパーマーケット  
 著者名 工藤ノリコ/作  
 出版社名 佼成出版社

スーパーの中で、ふたさんとひよこさんがかくれんぼをしていて、それを見つけるのも楽しかったようです。読みすぎて、ボロボロになりましたが、私と子どもたちの思い出がつまった宝本です。



【エピソード】

保育園の頃、母から息子に贈られた1冊が我が家の「宝本」です。夜、寝る前のひととき・・・。「絵本でも読もうか。」と言うと必ずこの「ふねにのっていきたいね。」を抱きしめ、目をキラキラさせて待っている息子・・・。3年生になった今でも、その姿は変わらず、笑ってしまうというか、癒されます。この本は、私たちが住んでいる島が舞台となっていて、息子の生活経験はもちろん、親である私の記憶までも重なります。本を読むというよりは、思い出をたどるような、一緒に船に乗って旅をしているような、なんとも心地の良い錯覚に陥り、眠りにつきます。息子の寝顔を見ながら、いつかこの子が島を離れるその時には、改めてこの本を贈りたいなあ、と思うのです。島の美しい自然や風景、ゆったり流れる時間・・・ささやかな幸せを感じさせてくれる1冊です。

母 子

書名 ふねにのっていきたいね  
 著者名 長崎夏海/作  
 おくはらゆめ/絵  
 出版社名 ポプラ社

母



子

書名 ちいさなおばあさん  
 著者名 わたりむつこ/作  
 中谷千代子/絵  
 出版社名 福音館書店

【エピソード】



小さい頃、眠る前にベッドに入ってから、母が読んでくれた本です。  
 いちご畑に住んで、いちごの管理をしている小さなおばあさんの生き生きとした姿や、畑の様子が聞いていてとても楽しく、ワクワクして眠れなくなり、寝かしつけるために読んでいた母の方が先に寝てしまい、何度も起こしては続きをせがんでいました。この本を読む度に、仕事で疲れているにもかかわらず、毎日のように絵本を読んでもくれた母に、申し訳なきと、感謝の気持ちを感じています。

母



子

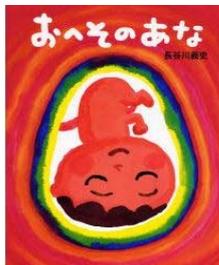
書名 うみのおまつりどんとせ  
 著者名 さとうわきこ/作・絵  
 出版社名 福音館書店

【エピソード】



私が幼少の頃、「いそがしいよる」を夢中になって読んでいたこともあり、ばばあちゃんシリーズが大好きになりました。色々な作品がある中で、息子が興味を示したのがこの本でした。突拍子もないお話の内容に親子でクスクス笑える楽しい本となりました。リズムカルで、ばばあちゃんらしいダイナミックなところが息子も大好きで、何度も読んで本はポロポロになってしまいましたが、これからも我が家の「宝本」として読み続けていきたいです。  
 私にとっても、ずっと大切にしていきたいシリーズです。

母



子

書名 おへそのあな  
 著者名 長谷川義史/作  
 出版社名 B L 出版

【エピソード】



今年2月、待望の第3子が生まれました。末っ子がお腹の中にいる時に、よく上2人に読んで聞かせました。  
 絵本の家族と同じ家族構成の我が家。家族全員、赤ちゃんを心待ちにしているのと同じように、赤ちゃんも家族に会えるのをとても楽しみにしているということが伝わったようです。  
 誕生後、「おへそからみてた?」「聞こえてた?」と赤ちゃんに聞いていましたよ。

母



子

書名 きんぎょが にげた  
 著者名 五味太郎/文・絵  
 出版社名 福音館書店

【エピソード】



我が家の三人の娘たちは、この本に出てくるピンクのきんぎょが大好きです。そのピンクのきんぎょは、とてもおちゃめで、にげて・・・、かくれて・・・を繰り返します。隠れているきんぎょをみつけては、喜んでいた娘たち。若い娘たちとの思い出がいっぱいつまっているこの絵本を、今度は孫たちに読んであげたいなと思っています。おちゃめなピンクのきんぎょが、最後にたどりついたのは、お友達がいっぱいいる場所。「もうにげないよ。」という最後の言葉も大好きです。

(団体取組の部より)



本校では昨年度より「我が家の宝本」として取組を始めました。各家庭での、宝本に関するエピソードを募集し、広く地域・保護者の方にも紹介するため、学習発表会にて展示を行いました。

また、読書月間には児童全員で「宝本エピソード」に取り組み、本にまつわる家族との思い出や、何度も何度も読みたくなる理由などを記載し、展示しました。

今年度は、月に1度「いきいき週間」の取組として、各家庭の「我が家の宝本」リストの作成を行っています。毎月1冊の本を選び、その本が宝本の理由を書いて保護者や読書指導担当・学校司書などがコメントを書き「我が家の宝本」を多くの人に紹介しています。

図書室掲示では、「宝本の花をさかせよう！」として、全校児童や職員の誕生日紹介とともに、一人ひとりの「宝本」を紹介しています。子どもたちは何を読むか迷ったときにも、先生方の「宝本」を参考にして、本を読んでいることも多く見られるようになりました。

今後も子どもたちによるペア読み聞かせを計画しており、それぞれの「宝本」を広く紹介していく場を提供していこうと思います。

市町村 鹿児島市 所属名 東桜島小学校



吉田小学校では、朝読書の時間に読書ボランティア（保護者）や中学生による読み語り、または6年生による低学年への読み語りなどを行っています。

学期1回は、読み聞かせグループ“おはなしカメさん”の方々によるお話し会（図1）があり、人形劇や超大型絵本のお話を通して、子どもたちへの本の興味・関心が高まっています。

また、毎月23日に「おやこ一冊読書」の取組として、各家庭の“宝本”を校内で紹介しています。“宝本”が図書日よりや掲示（図2）で紹介されると、子どもたちから「この本は図書室にありますか？」と問い合わせがあります。子どもから子どもへの横のつながりは、本の魅力が伝わる効果が高いようです。また、校内読書月間中は読み語りだけでなく、読書ゆうびん、本のポップ、帯作り等の取組や、図書委員によるパネルシアター、職員によるアニメーション等が計画される「校内読書祭り」も催されます。

市町村 鹿児島市 所属名 吉田小学校図書室



赤徳小学校芦徳地区では、毎月1回親子で参加する読書会を実施しています。今年度も、新1年生3名が仲間入りし、ますます読書活動が活発になってきています。6月には、新1年生の親子が「くりくり」という本を紹介し、読み聞かせしてくれました。人に聞かせるために、声の大きさや読み方を工夫するのは、考えている以上に難しいです。まだ、入学したての1年生ですが、はっきりと大きな声で読んでくれて、みんな心がひきこまれていきました。高学年のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちも、頼もしい後輩に、大きな拍手を送っていました。きっと家でも一生懸命練習してきたのだと思います。

これからも、芦徳の元気な子ども達が、本大好きになるように親子で活動していきたいです。

市町村 龍郷町

所属名 赤徳小学校芦徳親子読書会



輝北小学校では、家庭教育学級の呼びかけにより「宝本」の募集を行いました。紹介された宝本は、学習発表会で実際に掲示し、多くの方に手にとって読んでいただきました。学習発表会終了後、「宝本」は各ご家庭へ返却しましたが、紹介文は学校に掲示して、図書室には「宝本コーナー」を設け、子どもたちが友達の「宝本」を実際に読むことができるようにしました。友達の「宝本」ということが興味深いようで、多くの子どもたちが手に取っています。

市町村 鹿屋市

所属名 輝北小学校



児童が本を好きになるには、まず家庭での読書環境が大切です。

塚脇小学校では、保護者にもその点を理解してもらうために「親子20分間読書」を推進しています。子どもと同じ本を保護者が読んで、感想を「親子読書カード」に記入してもらいます。このカードは、提示したり、「図書だより」などで紹介したりしています。「お父さんと本を読めるから楽しい。」という児童の声や、「子どもの成長を実感できた。」「親子の会話のきっかけになった。」という保護者の感想もありました。

市町村 霧島市

所属名 塚脇小学校